

こころをつなぐ
お・葬・式

植木 広次
(東京葬儀株式会社 代表取締役)



忘れてはいけない本当のかたち

プロローグ

私がまだ駆け出しの葬儀屋だった頃、ビルの屋上から身を投げて自ら命を絶つた若いお母さんのお葬式を担当したことがあります。

当時、私はある葬儀屋に勤める身で、いかにスケジュール通りにお葬式を進行するかばかりに多くの気を取られていました。しかし、出棺前の最後のお別れの時、棺の中のご遺体を前にして、ご主人が小さな女の子を抱きかかえて、「この人がお前のお母さんだよ」と涙を流しながら何度も繰り返す女の子につぶやいていく姿に接した時、私の中で何かが変わりました。

もはやスケジュールのことなどは頭から消えてなくなり、涙を我慢することが

できなくなったのです。

「この人がお母さんだよ、よく憶えておきなさい」

ご主人は小さな女の子に、お母さんの顔をしっかりと記憶にとどめておいてほしかったのでしよう。何度も、何度も、そう話しかけていました。

おそらく、ご主人自身も、話しかけることによって、愛する人の死をなんとか受け入れようと努力されていたのではないかと、今は感じています。

今も、「この人がお母さんだよ」という言葉が頭から離れません。

私は心ゆくまでお母さんと最後のお別れをしてくださいという思いでした。

いや、むしろもっとも長い時間をかけてお別れをしてくださいという気持ちでした。

ご主人と女の子がどれだけの時間そうやっていたのか定かではありませんが、結局、出棺の時間は大幅に遅れてしまいました。しかし、私にはこれで良かったという満足感のほうが大きかったです。

葬儀屋という仕事が他の仕事と大きく違う点があります。

専門の技術や知識を身に付けることはもちろん大切ですが、もっとも重要なのは仕事に慣れてはいけないという点です。多くのお葬式に携わる私たちにとって、もっとも危険なのが仕事に慣れることなのです。

関係ない多くの人にとって、いろいろな場所で行われているお葬式は、たくさんある中のひとつに過ぎないかもしれませんが、遺族にとっては、たった一回きりの尊いものです。

故人の尊厳を守り、遺族に寄り添ってサポートする私たち葬儀屋は、一つひとつのお葬式が唯一無二のものであることを、常に意識していなければいけません。

もちろん、お葬式の専門知識がないと十分に遺族をサポートできませんから、日々の勉強と努力を怠ることはもってのほかですが、お葬式が一つひとつすべて特別であるという気持ちを忘れたら、いくら知識があっても葬儀屋としては失格です。

「この人がお母さんだよ」と涙を流してお母さんの顔を見つめていたお父さん

と小さな女の子の姿は、駆け出しの葬儀屋だった私に、そのことを強烈に教えてくれました。

現在、お葬式はいろいろな意味で変革の時を迎えています。これまでのお葬式があまりに形式にとらわれすぎて、心をないがしろにしてきたために、その形骸化が叫ばれるようになりました。その結果、とくに都市部では、遺族と親しい友人だけで行う家族葬や小規模なお別れの会が増える傾向にあります。

また、自分らしいお葬式を望み、生前にお葬式の予約をする人や、生前に自分のお葬式（お別れの会）を行う方もいます。

葬儀屋に対しても、あまりに効率のみを追求した心のこもっていないお葬式や、不透明な葬儀の料金に対する批判の目も厳しくなっています。

こうした批判を、葬儀屋はもっと真摯しんしに受け止めなければなりません。

今のように葬儀屋がお葬式をすべて取り仕切るようになったのは、それほど古い歴史があるわけではありません。おそらく、戦後の高度成長期以降のことです。

よう。それまで、お葬式は、地域社会が助けあって行うもので、近所の人たちが段取りを仕切ってくれたために、遺族は故人を失った悲しみにひたり自らをいやす時間を持つことができました。

しかし、高度成長期以降は核家族化が進展して、地域社会が崩壊したために、遺族自らがお葬式を仕切る必要に迫られたのです。愛する家族が亡くなった直後から、悲しみにひたる間もなく、いろいろな段取りを決めていかなくはならなくなりました。それをサポートするかたちで私たち葬儀屋の仕事が徐々に確立されていったのです。

その過程で、愛する人を亡くして呆然としている遺族の弱みにつけ込んで、不当に高い金額を請求したり、遺族の思いをくみ取ることをせずに、自分たちの都合のいいようにお葬式を進める悪徳葬儀屋がいたのは間違いありません。その時のイメージが葬儀屋に対する批判につながっています。

私たちはそのイメージを払拭するために、今の時代に合った心のこもったお葬式とはどんなものを常に考えていく使命があると思います。

そのためには、あらためてお葬式の役割とは何かといった原点に立ち帰って、故人の尊厳を守り、遺族の悲しみを大切にしたいとお葬式とは何かを考えていかなければいけません。

私自身は葬儀屋という仕事に対して誇りと感謝を持っています。それは人の優しさや愛情がお葬式の場面に凝縮して表れるからです。

どんなにお葬式の形が変化しても、それに携わる私たちがどれだけ心をこめることができたかが試されることに変わりはありません。

この本が、私自身を含めて心のこもったお葬式を考える一つのきっかけになれば幸いです。

第1章 お葬式の意味 葬儀屋の役割 15

- 身近な人の死によって初めて「死」と出会う 16
- 生前の姿を想像するところからお葬式は始まる 20
- お葬式の具体的なイメージを描くことが大切 22
- 葬儀屋との打ち合わせはカウンセリング 27
- 公平、正確な情報提供は葬儀屋の義務 30
- お墓をどうするか 34
- 宗教儀礼か社会儀礼か 37
- 時間に追われるお葬式への疑問 40
- お葬式費用の明確化は当然のこと 44
- サービス内容と価格のバランスが大切 49

お葬式の役割とは 52

第2章 葬儀屋が生まれるまで 59

- お葬式の起源 60
- 仏教との出会いで大きく変化 63
- 寺請制度の確立 67
- 本格的な葬儀屋の登場 71
- お葬式の総合的なサービス業へ 73

第3章 お葬式・本当にこれでいいのか 77

- プロとしての使命 78
- 右肩上がりのお葬式産業 81
- 効率優先か、心の優先か 83

自社斎場の明と暗 86

寺院会館葬の良いところ 90

お葬式の適正価格とは 93

理解しづらい価格体系 98

いまだに実態は変わっていない 102

互助会で多いトラブル 108

警察・病院との関係 112

第4章 葬儀屋という仕事 117

真夜中でも駆けつける二四時間勤務 118

なんとしても遺族の希望をかなえたい 122

言葉にならない心の中を見抜く 125

提案できる力を身に付ける 128

利益を第一に追求したら葬儀屋はだめになる 130

ある看護師さんの想い 133

遺族への共感が癒しにつながる 136

葬祭ディレクターとは 139

「エンバーミング」と「グリーンフ・ケア」 142

第5章 寺院葬という選択 147

葬儀を行う場所 148

人々の生活と密接に結びついてきたお寺 150

寺との縁が薄くなったのは戦後になってから 151

葬儀会館を利用するようになった理由 153

ゆとりをもって通夜から葬儀まで 155

宗教、宗派を超えた空間 157

葬儀の形式は自由 162

檀家でなくても受け入れてもらえる葬儀 164

由緒ある寺での葬儀も可能 166

お寺での葬儀は最後の母親孝行 172

第6章 お葬式の未来—葬儀屋の思い 179

「死」をめぐる変化 180

個性化・多様化が進む 184

生前予約とは 188

遺族の思いへの配慮も必要 192

死・お葬式の教育が必要 195

本当に心のこもったお葬式とは 198